



黒川神儀  
世羅郡世羅町早立八幡神社伝承

三番 秋光―九郎坊

四番 宗末―末光

往時より小國邑に右の豪農があり、その家の子郎党の中より童子をえらんで出場させた。夕顔切りの神事は、魔性を退治して、万民愉樂、五穀熟稔の為の自然神信仰時代の神事で、夕顔瓢に竹串で四本の足をつけ、木太刀で切り放つこと三太刀、上代の自然神の神刀をお借りして生活の安全を祈念するものと思う。

曳応行事は中世に於ける城主の出陣に際して必勝祈願を意味する太刀の授受の所作が伝承されたものと思う。奉納角力は近世の各名主が身内の童児を出場させて鎮守の神様をおなぐさめする行事で、各時代の神事が、自然神の象徴たる老大杉の元で行われている。これら三つの行事は年々秋の氏神祭の祭典後に氏子によって伝承されている。

小国上の大將軍の御神体は、自然石の地面から立ち上がったものをそのまま囲んで奥神殿とされている。大宮神社にも老樟老樫の太木があった。大坪の天満宮には神仏混淆時代の十一面觀音立像が残っている。

## 六、小國愛宕神社の夏角力

世羅西町大字小国の大宮八幡社の別社として祀られている愛宕神社は、毎年八月二十四日が祭で、奉納角力で昔から春五月八日の大平寺市と共に、近郷に有名で大変賑やかであった。思うにこの祭も農事と関係が深く、稲の出穂とそろって二百十日さえ無事に終われば、農作の一段落した農山村の一大娯楽の日でもあった様である。

愛宕神社は往古、京都愛宕山にあり火神軻遇突知命（かぐつちのみこと）・雷神等を祭る火防ぎの神として信仰される阿多古神社（延喜式にある）から勧請された。

中古仏者が入って地藏菩薩を安置して本地仏とし神仏混淆となった後又、愛宕権現勝軍地蔵・太郎坊天狗を加え、勝利を得る神様として尊崇せられた。明治維新以後各地に勧請された。愛宕さんは、言い伝えに依ると、約二百八十年前今屋小路に竹之屋、松葉居、東島（現巨畑）と云う人等が居られた由、小国市が大火で全焼した時、巨畑某が京に上り愛宕権現様を勧請して帰り火難除けの神様として祀られた。明治の末期の盛況であった頃、東方は甲山から羽田という本行司と八人位の力士が来り、西の方は三次板木方面から出場者があつて大変賑つたものである。『ボンデンかつぎ』本年は西の何村何兵衛であつたと話の種となつたものである。明治四十五年の八月角力を一年中止したら其の年の秋村内に家と駄屋を全焼する火災がおきた。其の時人々は愛宕さんのお祭をやらなかつたから神様のたたりがあつたのだと口々に言つた。

明治 大正 昭和 平成と今日に及び今は往時を想い見る影もないが、小国市の大難の守り神として崇拜され、商工会等の協力に依つて角力の行事は今日も守られている。

## 七、五行祭神楽（おうじかぐら）

昭和四十四年度広島県教育委員会が、県文化財保護委員会の推薦によつて無形文化財として指定したもので、世羅郡各地の祭で盛んに行なわれていた。俗にいう「おうじ」で大要を参考に記す。

### 物語

大王が自分の死の近づいたことを予知して、四人の子ども、太郎・次郎・三郎・四郎と后（きさき）に別れをする所から始まる。その時后は五郎（土神）を妊娠中である。四人の子どもに形見の幡（はた）をわけける。木の神太郎には青、火の神次郎には赤、金の神三郎には白、水の神四郎には黒、その時大王は后からもう一人の子にも形見をと言われて驚き、老齡の身に覚えのないことを言い切つてことわる。后は決意して「割腹して胎児を取り出して父よと泣かせ、身の貞潔を明らかにする。」というので、大王も吾が子と確認し、生まれ出る子に黄幡と大馬宝剣を与え、后にも形見を与えて神去るのである。土の神五郎は、生まれて誠に聡明で学問に長じ、一を聞いて十を知る成長振りであつた。やがて父を恋しがりその名を聞

世羅西町土記  
平城 神楽  
2022年  
3月

ろの御用川で「馬の口すすぎ」をさせ、馬一匹の両口をとって、山口屋才兵衛が乗り、神殿の宮回りをして、馬上から四方に向かって弓矢をはなつて清める行事である。山口屋に代々するようにとの覚書

と板木に出て孤堂を過ぎて帰宅することができた。近所の人たちにその話をして「おれがしんだら、死がいを狼にやることになっている」といつていた。三年ほどして仲助じいさんは死んだ。講中の者

が、集まって葬式をし、そらの山に葬った。その夜、狼の鳴き声が谷中に響きわたった。谷中の人々は狼が仲助を取りに来たと、戸を固く閉ざしていた。恐怖の一夜が明けて、講中のものがおそろおそろの仲助爺さんの墓場に行ってみると、赤土が四方に散乱してなんと陰惨な光景であった。講中頭の古老が「仲助じいさんおるおる」といって、皆に土を寄せさせて早々に引き揚げたという。

そこで胡子屋の主人は京に上り、愛宕社を勧請して帰り、村民と相ばかり大宮神社境内に愛宕社を建てた。そして毎年七月二四日（現在八月二四日）に祭札を行い、相撲を奉納することを誓った。火難よけを祈願し、愛宕祭を執り行ったところ、霊験あつて以後は火難をまぬがれたという。

### 愛宕社の相撲

小国市場は太平寺の門前町として栄え、本橋本市場とって繁盛した。市岡・市口・今屋小路・大門小路などという地名が今も残っている。町屋橋（松屋橋と転訛）市岡の胡子屋などもあった。小国市が火災で太平寺が焼失したことがあった。たびたびの火災のため小国市は衰微し、小さな市場となってしまった。

昔から愛宕相撲の「ほんでん」は、今年はどこかとなるか、うわさされ、近郷から力士が集まって盛会であった。今も愛宕相撲は続いている。

### 光友谷のひいる

下津田の光友谷に「祇園社」という小さな祠ほくらがある。この小祠の御神霊は小童ひち（甲奴郡甲奴町元の広定村小童）の祇園社の分神であると伝えられている。むかし津田の勢力者が小童に行つて盗んだもので、途中小童の人々が追いかけて奪い返そうとして、六反田あたりまで追いかけたが果たさず、あき